

日本肝がん分子標的治療研究会

顧問: 沖田 極
神代正道
幕内雅敏
松井 修

発起人一同:
(アイウエオ順)

荒井保明	金子周一
有井滋樹	工藤正俊
池田健次	國土典宏
池田公史	國分茂博
石井 浩	熊田 卓
泉 並木	坂元亨宇
市田隆文	高山忠利
大崎往夫	田中正俊
奥坂拓志	古瀬純司
角谷眞澄	西尾和人
金井文彦	溝上雅史

事務連絡係: 工藤正俊

設立趣旨と本研究会の目的

癌の分子標的薬治療は他の癌腫(肺癌、乳癌、大腸癌、腎臓癌、白血病、GIST など)において先行して開発され実際積極的に臨床応用されております。また肝細胞癌においても SHARP study および Asia Pacific study において世界で初めて経口マルチキナーゼインヒビターである Sorafenib の有効性が示され「切除不能肝細胞癌」を適応症として本邦でも平成 21 年 5 月 20 日に承認されました。また Sorafenib に留まらず、他の分子標的薬も続々と第三相試験に入ってきており、さらにレチノイドも近々結果が公表される見通しとなっております。このようなことから肝癌の世界でも今後ますますこの領域の発展が見込まれます。

このような状況の中で従来、主に日本で経験的に開発されてきた治療に加えてこのような新しい分子標的薬治療が一つの選択肢(あるいは combination?)として加わることは肝細胞癌治療にとっては epoch making な出来事であるとも言えます。しかしながらこれらの薬剤の有効性を予測するバイオマーカーの探索あるいは副作用対策、他の薬剤とのコンビネーションの有効性・安全性など様々な問題が残されていることも事実であり、それに対する新たな臨床試験も次々と計画されているのが現状です。

実臨床で Sorafenib が使える日も間近に迫ってまいりましたが実際に処方する我々、臨床家としてもこのような分子標的薬に対する基礎的、臨床的、あるいは有害事象対策に対する知識を深めることは極めて重要なことと考えられます。したがって今年暮れもしくは来年初めくらいに全国規模での研究会を立ち上げ症例を持ち寄って一例一例の効果・安全性・使用法の実際についての検討を行うことは肝癌治療医にとって極めて有益なことではないかと考えます。また他の分野における分子標的薬治療の経験・現況や基礎的な研究者を講師として招くなどの企画も極めて意義のあることではないかと考えております。このような趣旨については沖田 極先生、神代正道先生、幕内雅敏先生、松井 修先生には既にご賛同頂き、顧問に就任して頂いております。また多くの先生方にも既に発起人の御賛同を頂いております。基本方針として特定のメーカーのサポートではなく、広く浅く趣意書を募って運営してゆく方針でおります。

いずれにしても、このような主旨に御賛同頂きまして是非、世話人の一人として御尽力頂きたいと考えております。研究会としてはとりあえず最初の 2 年間は年に 2 回程度開催を、そしてその後は年 1 回程度の開催くらいでどうかと考えております。

(文責 工藤正俊)